

の補充をうけるも次第に肥満、糖尿病の悪化をみたため精査コントロール目的に再入院す。ACTH-cortisol系は Insulin 低血糖, LVP 負荷, rapid ACTH 試験で低反応, 持続的 ACTH 試験で反応あり。GH は Insulin 低血糖, Arginine 負荷でも反応悪く, GRF 負荷で低めながら反応あり。T₃, T₄ やや低値だが TSH は TRH 負荷で正常反応。CT では empty sella 症候群の合併を認めた。今後 hydrocortisone 補充後の GH 反応性を検討し GH 低下が一次性かどうか検討する。

10) 末端肥大症を来たした小人症の1例

富樫 清明・金子 兼三 (長岡赤十字病院内科)
鴨井 久司

症例は50才、家婦。家族歴では母が患者と同程度の低身長者で、父も小柄。帝切分娩による息子1名は正常身長。病歴ならびに身体所見では、幼児期より身長伸び不良で、最終身長135cm(-2.70 SD)、体重44kg。初潮15才、閉経48才。知能軽度低下。病識がなく写真で判定したが、6年位前より鼻翼肥大、眉弓部突出、深い鼻唇溝などの末端肥大症顔貌と指趾肥大が緩徐に進行。昭和59、4糖尿病発見され、血糖コントロールつかぬため(HbA_{1c} 14.1%)、昭和61.6当院に紹介され入院した。検査成績では、GH 40ng/ml前後の高値で、TRHに著明な上昇反応、GRFに遅延上昇反応、CB154に抑制反応を示した。SM-Cは血糖コントロール後4.0u/ml以上の高値。下垂体CTにて腫瘍の存在が明らかのため、治療としてHardy手術施行したが完全摘出出来ず、術後照射とCB154療法の併用によりGHは10ng/ml以下に低下した。本例は体質性小人症と考えられるが、小人症故に併発した末端肥大症の発見が遅れたものと思われる。

11) 多飲多尿を主訴とした胚細胞腫の1例

大石 昌典・石塚 利江 (新潟市民病院) 小児科
小田 良彦
田中 直史・山田 彬 (同 内分泌科)

症例は、8歳の女兒、主訴は多飲多尿。現病歴は、昭和61年8月頃より主訴が出現、更に9月より症状が増強し、またここ1年の身長の増加不良も指摘され紹介入院となる。

頭部CTにて鞍上部に所々HDAを伴い強度に増強される円形の腫瘍を認め、またαFP、HCG高値により胚細胞腫と診断した。下垂体前葉ホルモン系の検査では、GHの低反応、LHの持続的高値、TSHの低反応が見られたが末梢甲状腺ホルモンは正常であった。

4時間水制限試験では、ほぼ正常の反応と考えられ更に血漿浸透圧が270mOsm/kgH₂O台にもかかわらず強い口渇感を訴えていたことなどにより、本例の多飲多尿の原因を腫瘍による視床下部の口渇中枢の障害によるものと考えた。

12) 経蝶形骨洞手術後に於ける尿量変化について
一特に低Na血症と関連して—

田村 哲郎・黒木 瑞雄 (新潟大学脳神経)
横山 晴・佐藤 宏 (外科)
田中 隆一

1978年以来当科で施行し、術後10日以上尿量変化を検討できたHardy手術139例141件を対象とした。内訳はProlactinoma 71例、Acromegaly 25例、Cushing病7例、TSH産生腺腫1例、LH/FSH産生腺腫3例、non-functioning 31例、その他3例である。術後尿量変化は6型に分類し、一日尿量3ℓ/日以上を多尿とした。I型は術後2日以内に多尿となり、1週位で正常化するもので31.2%、II型はI型のあと再び多尿を示し正常化するもので17.0%、III型はII型の2度目の多尿が遷延するもので6.4%、IV型は術後早期から多尿が遷延するもので5.7%、V型は術後数日して一過性の多尿がみられるもので14.2%、VI型は経過中全く多尿がないもので25.5%にみられた。また術後の低Na血症は12例(8.5%)にみられ、多くは乏尿に關係して認められた。術後の尿量変動および低Na血症出現の機序については不明であり、今後さらに詳細に検討していく必要があると思われる。

13) クッシング病の自験例9例について

谷 長行
他、内分泌班一同 (新潟大学第一内科)

昭和55年以来Hardy手術を実施したクッシング病患者9例について総括し、以下の知見を得た。1) 中年以下の特に女性の場合、糖尿病・高血圧症はもとより月経異常・多毛など何らかの内分泌異常を認めた場合、必ずクッシング病を疑う必要がある。2) 尿中17-OHCS基礎値に周期的変動を認める例、2mgのDexamethasoneで抑制される例、逆に8mgでも抑制されない例など1つの内分泌検査所見のみでは確診不可能な場合が多い。3) 画像診断はきわめて有用である。副腎シンチで両側副腎への取り込みを認めることにより副腎腺腫と比較的容易に鑑別でき、頭部CT所見と合わせて診断を強固にできる。4) 1mgのDexamethasoneを前

投与した L-8-VP test は Cushing 病 Hardy 手術後の follow-up に有用である可能性が示唆された。

特別講演

クッシング病の治療について

岸和田市民病院
院長 景山 直樹 先生

第26回新潟化学療法同好会

日時 昭和62年6月20日(土)
午後3時
会場 ホテルイタリア軒

一般演題

1) HIV 抗体の検出状況について

星野 弘之・嶋津 芳典
五十嵐謙一・田崎 和之 (新潟大学第二内科)
庭山 昌俊・和田 光一
荒川 正昭

私達は、昭和62年2月1日より外来受診者の HIV 抗体測定を開始した。昭和62年5月末までの外来受診者は、男性134名、女性46名計180例で、受診動機は、異性交118例(うち外国人と56例)、男性同性愛10例(うち外国人と1例)、風俗営業の女性9例、輸血・血液製剤使用者22例、ビザ取得のため2例でした。外来受診者においては、HIV 抗体は全例陰性でした。尚この他、他施設からの37例で1例 HIV 抗体陽性例を認めましたが、その症例は血液製剤使用例でした。

2) 臨床分離菌の ofloxacin 感受性の推移

尾崎 京子・高野 操 (新潟大学検査部)
小柳 典子・狩野 倫佳

私達は最近の臨床分離菌の OFLX 感受性について、1985年のデータと比較し、その推移及び耐性菌について検討したので報告する。ディスク感受性で $\#$ 以上を感性とし、感性率を集計した。

S. marcescens は1985年が86.7%でその後が71.7%と低下していた。*P. aeruginosa* は93.3%が84.2%へ、*S. aureus* は100%が87.0%へと低下していた。*S. marcescens* を除く腸内細菌9菌種、*H. influenzae*、*S. pneumoniae*、*B. catarrhalis* はいずれも95%以上の高い感性率であった。

耐性菌の増加していた菌種について検討した。

P. aeruginosa は入院より外来の方が分離頻度が高く、外来の多くは喀痰由来株だった。*S. aureus* は逆に入院での分離頻度が高かった。検体別では全体に尿からの分離頻度が最も高かった。*S. aureus* の CEZ 感性株と CEZ 耐性株で OFLX の耐性を比較したところ、CEZ 耐性株で有意に OFLX 耐性株が多い(18.8%)という結果が得られた。

3) New Quinolone 剤の眼科的応用

一点眼剤について

大桃 明子・坂上富士男 (新潟大学眼科)
田沢 博・大石 正夫

新キノロン剤である Norfloxacin (NFLX) 点眼剤の基礎的・臨床的検討を行った。

家兎眼を用いた 0.3% NFLX 点眼液 2滴 1回点眼時の経時的結膜嚢内滞留濃度は5分後 1340 $\mu\text{g/ml}$ で15分後 1/2, 30分後に 1/4 となり以後すみやかに減少したが6時間後でも 8.3 $\mu\text{g/ml}$ 証明された。同剤 2滴 5分毎 5回点眼時の眼組織内濃度は正常家兎眼で外眼部組織に 0.38~7.84 $\mu\text{g/g}$ 、眼球内部に 0.01~0.68 $\mu\text{g/g}$ 、炎症眼で外眼部に 0.23~39.8 $\mu\text{g/g}$ 、眼球内部に 0.01~41.5 $\mu\text{g/g}$ の移行がみられた。正常眼では角膜に、炎症眼では角膜・前房水に高濃度を認めた。

これまで行われた 0.3% NFLX 点眼薬の pilot study の成績では、累積有効率は NFLX 1日3回点眼群で 89.1%、1日4回群 87.3%、MCR 点眼群 88.1% であり数値的には NFLX 1日3回群が良好であったが統計的には各群間に有意差はみなかった。この秋に発売予定の OFLX 点眼液の pilot study の成績は、0.3% OFLX 群で 98.5% の累積有効率で、0.5% 群 97.5%、MCR 群 89.8% で統計学的に 0.3% 群で MCR 群より有意にすぐれていた。その他の各群間に有意差はみられなかった。

4) 抗生物質の蛋白結合の研究

庭山 昌俊・星野 弘之
嶋津 芳典・田崎 和之 (新潟大学第二内科)
五十嵐謙一・和田 光一
荒川 正昭

セフェム系抗生剤から蛋白結合率の高い Cefazolin (CEZ) を選び、CEZ の血清蛋白結合の基礎的検討を行った。蛋白結合率の測定は遠心限外濾過法で行った。

CEZ の濃度と蛋白結合の関係の検討では、濃度が 10~100 mcg/de では、蛋白結合に殆んど影響はなかつ